わたしの研究　㊴

テーマ

〈われわれ〉〈みんな〉の外部

杉本　　学

私の専門分野は、社会学の理論および学説史です。とくに19世紀末から20世紀にかけてドイツで活躍したゲオルク・ジンメルという哲学者によって提唱された「形式社会学」が中心となっています。こう言うと、なんだか小難しい概念をこね回して、実社会とかけ離れた思索に没頭しているように思われがちです（たしかにそういう面があることも否めません）が、そもそもの出発点は、実生活に関わる素朴な疑問でした。それは、ひとことで言うと「〈われわれ〉とか〈みんな〉って誰？」という疑問です。

ある集団の中で、人が「私たちは○○だ」と言うとき、その集団の全員を指したつもりでいながら、じつは一部の人びとは「○○」に当てはまらないことがあります。同様に、「みんな」という言葉が本当に全員を指すのかといえば、そうでないこともしばしばです。私は、ある集団の中でたまたま〈われわれ〉や〈みんな〉から外れる立場にあったという経験をきっかけに、このことが気になり始めるようになりました。そうなってみると、逆に自分自身もしばしば誰かを排除する側に立っているということにも気づかされます。

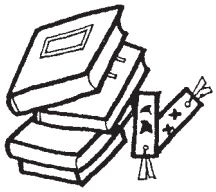
さて、そうした関心をもってジンメルの著作を読むと、この思想家が、〈われわれ〉や〈みんな〉から排除される者に対して敏感であり、また、〈みんな〉に同化しない者のポジティブな可能性に期待した人物であることに気づきます。以下、そのことに関わるいくつかの論点をご紹介しましょう。

100年前に出版された代表作『社会学』の中に、「よそ者についての補説」という有名な論考があります。「よそ者」（原語はFremdeで「異郷人」とも訳されます）とは、集団に外から入ってきて定着した者であり、集団の「内部かつ外部」という両義的な立場によって特徴づけられます。その論考では、よそ者と他のメンバーたちとの関係について、さまざまな考察が繰り広げられますが、とくに強調されているのが、よそ者の客観性です。すなわち、よそ者は集団内の党派性や固定観念にとらわれないため、より客観的な態度で集団に参与するというのです。また、他のメンバーたちはよそ者に対し、より抽象的な共通性しか感じないということも指摘されています。他のメンバー同士はその集団特有の要素（たとえば歴史や慣習など）を共有しているのに対し、よそ者との間には、より抽象的・一般的な共通点（たとえば「人間である」こと）しか見出せません。そのことが、かえってよそ者を疎遠に感じさせ、差異を強く意識

させることになります。

このような「よそ者」論を拡大解釈して、「よそ者」を移住者に限定せず、さまざまな集団におけるマイノリティの立場に重ねて考えることもできるかもしれません。集団内のマジョリティは、自分たちがあくまでも集団の一部にすぎないことを忘れ、自分たちの利害やものの見方を、普遍的で「あたりまえ」なものとみなしがちです。ジンメルは、そうしたこともよく認識していました。たとえば、かれは当時ドイツのフェミニズム運動に関して発言を行いましたが、その際、文化における男性的バイアス（性別を超えた普遍的なものとされている見方・考え方が、じつはもともと男性を基準としたものであること）を指摘しています。このような、集団の中で普遍的で「あたりまえ」と思われている事柄に対し、疑問を投げかけてそれを相対化するのが、マジョリティにとっての「よそ者」であるマイノリティではないでしょうか。

また、同じく『社会学』の中に「貧者」という興味深い論考もあります。そこでジンメルは、「貧者」は、単に経済的に困窮しているだけではなく、社会によって扶助を受けるべき者と見なされることによって、はじめて社会的カテゴリーとしての「貧者」になると論じています。そして「貧者」というカテゴリーで認識されるということは、一定の社会層から外に排除されたことを意味すると指摘します。さらに、この貧者に対して社会的な保護が行われる動機について、「権利と義務」という観点から次のように述べます。社会には貧者を保護する義務があるが、義務は必ずしも相手の権利とセットになっているわけではない。貧者保護が、保護する側の義務感や道徳感情を満たすため、または社会の利益や秩序維持（たとえば犯罪防止）のために行われるならば、その際、貧者本人の権利はほとんど意味をもたない。つまりこの場合、貧者保護は「社会のため」に行われるのであって、当の貧者自身はいわば蚊帳の外に置かれるというわけです。

以上、ジンメルの思索から、〈われわれ〉や〈みんな〉から外れる者に関する論点を、いくつか取り上げて紹介してきました。かなり抽象的な話になってしまいましたが、これらのうち一つでも、興味をもっていただける話題があったら幸いです。

（本研究所研究員　社会学）